第4回　天神と天神さん（二）

■ 菅原道真、怨霊から「天神さん」へ

前回（第3回）は、五条天神宮の「天神」を紹介いたしました。ところで、「終い天神」など、ふだん意識せずに「天神」という言葉を使っていますが、この場合は菅原道真の「天神さん（天満天神）」のこと。五条天神の「天神」と菅原道真の「天神さん（天満天神）」は違うのですよ。前回で五条天神を説明しましたので、今回は、菅原道真の「天神さん」を取り上げることにいたします。

三善清行と菅原道真との因縁は、第2回で紹介した場面のあとでも続きます。右大臣菅原道真が、左大臣藤原時平の讒言により大宰府に左遷され、そこで怨念を残しながら病死したのは、ご存じのことでしょう。このため、時平は道真の怨霊で苦しんだといわれています。時平の病気平癒の祈祷を、三善清行の子の浄蔵大徳がおこなった際に、清行が見舞いにゆくと、時平の左右の耳から青竜が頭をだして、浄蔵の祈祷をやめさせるようにせまる場面が『北野天神縁起絵巻』などにでてきます。怨霊の意を察した清行にうながされて、浄蔵が退出すると、まもなく時平が息をひきとったという説話です。三善清行は、浄蔵の祈祷により一時生き返ったという一条戻り橋の蘇生説話でも有名です。この話は、

仁丹町名看板の所在（西洞院通を中心に四条から松原まで）

また別の機会に。

『大鏡』の時平伝は、ほとんどが菅原道真左遷の記事で埋まっており、藤原時平自身は敵役となっています。しかし、その実像は辣腕家によくあるタイプと推測され、菅原道真を追い落としたのも、これまた、よくある政争にすぎません。延喜九年〔九〇九年〕に藤原時平が若死したのも、道真の怨霊によるものではなく、冷静に考えると単なる偶然です。延喜九年〔九〇九年〕藤原

時平死去に伴い、次弟仲平を飛び越えて、その弟藤原忠平が藤氏長者を継ぎ、延喜格式を完成させました。早死にしなければ延喜格式の完成はおそらく時平の功になっていたでしょう。

あとを継いだ忠平は、長兄時平と対立していて、むしろ菅原道真とよい関係にあったと伝えられています。このことが、延喜三年〔九〇三年〕大宰府での死から、ほどなく菅原道真の名誉回復が実現した、一つの要因であろうと考えられています。実際に、延喜十九年〔九一九年〕に、道真の墓所安楽寺をもとに、藤原仲平の奉行により太宰府天満宮の社殿が造営されています。

しかし、その後も天変地異が鎮まらず、道真の怨霊のせいだという噂がひろまってきました。菅原道真の追い落としに加担した藤原菅根が落雷で死亡したのが延喜八年〔九〇八年〕、藤原時平の死が延喜九年〔九〇九年〕。皇太子の保明親王の死が、道真の怨霊のせいとされたため、延喜二三年〔九二三年、改元して延長元年〕に左遷の詔書を破棄したうえ、道真は、右大臣に復され、正二位を追贈されています。そのあとも、変事や早世が続きました。さらに、内裏に落雷があって、一味の藤原清貫、平希世が死亡したのが延長八年〔九三〇年〕。醍醐天皇もご心痛でこの年に逝去。平将門が菅原道真の神託により新皇と称するのが、天慶二年〔九三九年〕。

後継の為政者の一部（藤原忠平一派）にとって都合がよかったためでしょうが、時平とその係累が早死にあるいは変死したことや天変地異も、すべて菅原道真の怨霊のせいだとされました。内裏に雷が落ちたときの顛末は、のちに、能の『雷電』の主題になっています。内裏の中を荒れ狂った雷神も、ついには法性坊律師僧正の法力に屈服し、「天満大自在天神」という称号をおくられ、虚空に去ると筋書です。

道真の乳母と伝えられる多治比文子（たじひのあやこ）が北野の左近馬場に祠を建てよという神託を受けて、それは急にはかなわぬため、自宅に文子（あやこ）天満宮（間之町通花屋町下ル天神町）を祀ったのが、天慶五年〔九四二年〕。この祠を北野に移して、天暦元年〔九四七年〕に北野天満宮が造営されています。永延元年〔九八七年〕に、一条天皇が、宣命で「北野におわします天満宮天神」としたことから北野天満宮と呼ばれるようになりました。道真は、正暦四年〔九九三年〕に太政大臣を追贈されています。正暦五年〔九九四年〕、北野天満宮に「正一位天満大自在天神」の神号が贈られました。実に、天皇およびその近臣は、百年近く、道真の怨霊に悩まされていたわけです。現在なら、声高に原因糾明や対策を求められるところですが、この当時は、原因究明などすぐにはできるはずがないので、天変地異の理由付けに怨霊を利用していたということもできます。あるいは、北野天満宮の側も、怨霊伝説を意識的に利用して勢力拡大をはかったのかもしれません。

そののち、怨霊は鎮まり、菅原道真の学者としての側面が強調されるようになります。かくして、菅原道真の「天満天神」は、「天神さん」の愛称で、学問の神様として日本全国に広まるようになります。「天神」の側も、営業政策のために（こんな言葉は神社にはふさわしくはありませんが）、相殿として、「天満天神」を祀るように変質してゆきます。この結果、「天満天神」が古来の信仰である「天神」〔少彦名命。五条天神や北白川天神の祭神〕と混同されるようになり、今日では「天神」といえば、「天満天

神」を差すように、誤用が広まってしまいました。

ところで、好都合なことに、北野天満宮まで行かずとも、「天神」を祀った五条天神宮のすぐ近くに、「天神さん」を祀った菅大臣神社〔菅大臣天満宮〕があるのですよ。参道入口は、高辻通若宮。五条天神宮の所在地、松原通西洞院の一筋北です。まったく、京都とは歴史を探訪するためには便利なところです。

■　菅大臣神社〔菅大臣天満宮〕

さて、松原若宮の十字路から若宮通を北上しますと、高辻通に面した菅大臣神社の参道に出ます。参道までたどり着く途中の西側、隣り合った町家の二階に、仁丹町名看板「若宮通松原上ル藪下町」①と「若宮通松原上ル菊屋町」②が南北に並んでいます。基準の十字路が同じで、町名だけ異なるというめずらしい例。しかも、隣り合った二軒のお宅といっても、長屋形式で屋根や家屋はつながっていますので、町名看板の出現状態としては、貴重なもの。「藪下町」は、先ほどの光円寺、お好み焼き屋竹、松原道祖神と同じ町内ですから、松原若宮の十字路の四周の広い地域が一つの町内です。

「菅大臣神社」、通称「菅大臣天満宮」（仏光寺通新町西入ル菅大臣町）の創建は、菅原道真没後すぐと伝えられていますが、詳細は不明。平安時代であることは、確かです。祭神は菅原道真。境内は、菅原道真の邸宅の跡とされています。道真の父、是善の時代から「菅家廊下」という私塾を開いていて、門下生があまたいたらしい。

若宮通　松原上ル藪下町①

若宮通　松原上ル菊屋町②

菅大臣神社の参道は、南は高辻通、西は西洞院通、北は仏光寺通の三方にあります。社殿は、応仁の乱、天明の大火、どんどん焼で焼失。その都度、再建されています。現在の本殿は、下鴨神社本殿（天保六年〔一八三五年〕建立）を明治二年〔一八九六年〕に移したもの。火御子社（祭神、大雷神）、白太夫社（祭神、渡会春彦）、老松社（祭神、島田忠臣）、福部社（祭神、十川能福）、春崎稲荷社、三王稲荷社などの摂社・末社があります。菅原道真が誕生したときに産湯に使ったとされる井戸も残っています。

境内には、「飛梅」があり、道真が大宰府に出立するときに別れを惜しんだ梅とされます。このときに読んだ歌は有名で、拾遺和歌集に採録されています。

ながされ侍けるとき、家の梅花をみ侍て　　贈太政大臣 菅

菅大臣天満宮

東風（こち）ふかば、匂ひをこせよ梅の花
　あるじなしとて春をわするな

拾遺和歌集巻第十六・雑春・一〇〇六

道真を慕って大宰府まで飛んでいったという伝承から名づけて、飛梅。下の句の「春をわするな」は、高校の古文で、「春なわすれそ」という別の形で習うことが多いとおもいます。係り結びの「な・・・そ」の例としてうってつけですから。『大鏡』には、この係り結びの形で載っています。

かたがたにいと悲しくおぼしめして、御前の梅のはなをご覧じて、

こちふかば、にほひおこせよ梅のはな
　あるじなしとて春なわすれそ

『大鏡』上之巻・時平列伝

こんな引用をしていると、高校の古文の授業のようになってしまいますね。そう言い訳しながらも、さらに高校古文路線を続けましょう。道真は、漢詩にも優れており、大宰府の観音寺の鐘を聴いて、次のような漢詩をつくったと、『大鏡』に見えます。

またいと近く観音寺といふ寺ありければ、鐘の声をきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看二瓦色一
觀音寺只聽二鐘聲一

『大鏡』上之巻・時平列伝

この漢詩は、『菅家後集』からの引用で、『和漢朗詠集』六二〇にも載っています。この詩でも、高校の古文の授業を思い出します。例の、清少納言の『枕草子』。白居易（はくきょい）〔白楽天（はくらくてん）〕の「香炉峰（こうろほう）の雪は簾（すだれ）をかかげて看る」を踏まえた段、清少納言の才気あふれる応答を多分おぼえていらっしゃるでしょう。道真のこの漢詩は、もちろん白居易の詩を踏まえたものです。このほかにも、道真の漢詩は、たくさん『和漢朗詠集』に採録されています。「天神さん」が学問の神様として、大学受験にご利益があるということになったのは、むべなるかな。

さらに懲（こ）りもせずに、高校古文路線を続けましょう。紀貫之ら

〔八六六または八七二～九四五〕によって、古今和歌集が撰進されたのは、延喜五年〔九〇五年〕のことです。菅原道真〔八四五～九〇三〕の死は延喜三年〔九〇三年〕ですから、たったの二年後の出来事です。こんなことさえ気がついていなかったのは、歴史と文学史を同時に習ったことがないせいです。気になるのは、左遷の身になった菅原道真の歌が、古今集に採録されているかどうかです。当時は多分、道真の左遷は大きな事件であったはずですが、そのわりには二首採られていますので、公平なのが意外です。そのうちの一首は、百人一首にもある歌です。

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にてよめる　　すがわらの朝臣

此たびはぬさもとりあへずたむけ山
紅葉の錦神のまにまに

古今和歌集巻第九・羇旅歌・四二〇

菅原道真の『菅家文草』などの漢詩文、紀貫之の『古今集』などの和歌や『土佐日記』などの随筆、藤原時平・忠平らの『延喜格式』は、いずれも文学史・文化史にとって特筆すべきことですが、これらが、時平・道真（醍醐天皇・宇多上皇）の政争という生臭い歴史的事実と同時代であったことは驚きです。なお、詞書（ことばがき）にある「朱雀院」とは、宇多上皇のことです。また、菅原道真を、群臣なみに「すがわらの朝臣（あそん）」としていることに、当時の政治情勢がうかがえます。世が世なら、「右大臣 菅」とでもするところです。

菅大臣神社の北参道を仏光寺通に出ると、北の鳥居の向かい側の町家の二階に町名看板「佛光寺通新町西入菅大臣町」③が掲げてあります。町名は「菅大臣町」。もちろん菅大臣神社にちなんだものです。

佛光寺通（ぶっこうじどおり）新町西入（しんまちにしいる）菅大臣町（かんだいじんちょう）③

紅梅殿〔北菅大臣神社〕

この看板ある町家のすぐそばの路地の入口に「菅家邸跡」の石碑があり、北へ進んだ奥の突き当たりが、紅梅殿〔北菅大臣神社〕。祭神は菅原是善（菅原道真の父）。今は、周りを建物に囲まれた一角に、社殿が残るだけで、往時の隆盛は想像できません。

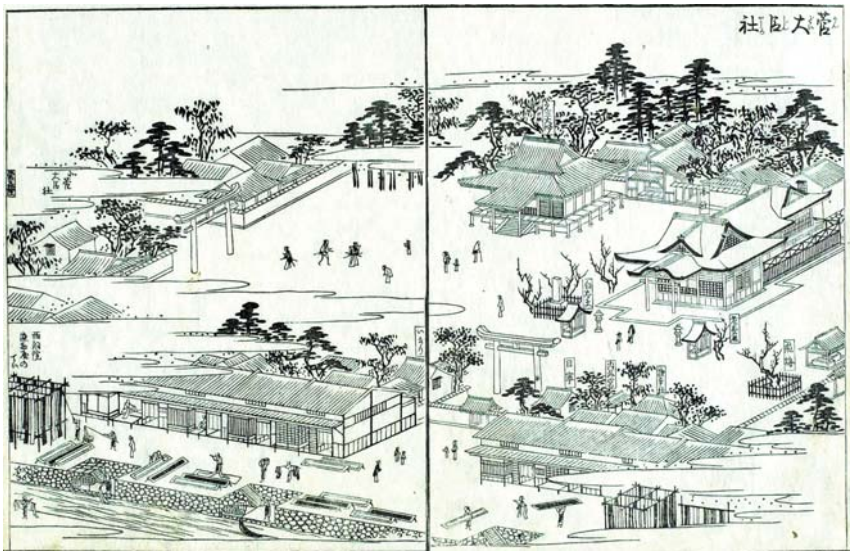
鉤型の路地を抜けると、児童公園になっていて、西洞院通に出られます。

紅梅殿の路地を仏光寺通に戻って、東に進むと、さらに二枚同じ「佛光寺通新町西入菅大臣町」④⑤の町名看板を見つけました。切り取った写真では、同じものを複製したように見えますが、三枚とも違うものです、念のため。それにしても、同じ町名の看板が三枚も見つかるのは、滅多にないことです。

佛光寺通　新町西入菅大臣町④

佛光寺通　新町西入菅大臣町⑤

『都名所図会』には、菅大臣社を西南の方角から見た鳥瞰図が載っていて、天明の大火（一七八八年）の前の姿が描かれています。切り取って引用した画像を見ると、現況とは大違いの広い境内で、本殿の北側に、元三大師堂があり、往時の信仰のありかた（神仏習合）を示しています。本殿の前、左右に白太夫社と老松社があり、さらに南（右下）には、飛梅が描かれています。図の



『都名所図会』菅大臣社の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

中央下手の鳥居は、現在の西洞院に面したものに相当します。その左手に稲荷神社、右手には今はない日寧社、内外宮、柿本社が描かれています。本文を見ると、「誕生水は本殿の南の垣の内にある」となっていますので、飛梅の右上方の建屋がそれに当たると推定され、現在の位置とは違うようです。

この図で注目すべきなのは、むしろ画面下方に描かれた西洞院川の情景です。河岸の石垣が切り取られた洗い場で、染め上がった布をすすいでいるところ、天秤棒で染めた布を運んでいるところ、すすいだ布を洗い張りの板に貼って乾かしているところ、右下隅と左下隅に櫓を組んで、布を干しているところなどが描かれています。

明治時代に西洞院川が暗渠になってしまったので、こんな風景は望むべくもありません。それでも、周辺には多くの染物関係の企業や工房が健在です。染色関係の景況は必ずしもよいものではありませんが、次世代へ継承するために模索が続けられており、伝統工芸体験工房（http://www.taikenkobo.jp/）など、京都観光と組み合わせた試みがあります。体験工房の一つとして、菅大臣神社の境内に、折りよく、「森益染絞（もりますせんこう）森本」（高辻通新町西入ル菅大臣神社境内）があり、絞り染の半日体験コースを催しています。

■　道元禅師示寂聖地の碑

東中筋通は、高辻通を越えると一段と狭くなります。その入り口近くに、「道元禅師示寂（しじゃく）聖地の碑」（高辻通東中筋西入ル北側永養寺町）があります。すでにあった「道元禅師遺跡之地」の碑のかたわらに、七百回大遠忌報恩記念のために昭和五四年に建てた碑。もとの碑は、この写真には写っていません。道元禅師〔一二〇〇～一二五三〕は、比叡山で出家、建仁寺で禅を学んだのち、一二二三年〔貞応二年〕入宋。帰国後、曹洞宗を開き、越前〔福井県〕に永平寺を建立。病のため、京都に戻り、弟子覚念の屋敷に滞在中に没し、石碑は、その地を示したものといいます。

道元禅師示寂聖地の碑

詮索好きのわたしは、この石碑のある町名「永養寺町」がひっかかりました。現在、永養寺は、寺町通高辻上ルにありますので、この町名とはあわない。なぜ、永養寺をおもいだしたかというと、それは天明の大火（一七八八年）。この火元は、鴨川東岸の団栗図子（どんぐりのずし）ですが、折からの強風にあおられて、西岸の永養寺に飛び火し、そこから京都中に燃え広がりました。

格致地区のホームページ（http://web.kyoto-int.or.jp/people/kakuchi/chomei.html）によれば、「永養寺町」の町名の由来となった永養寺は、一四八一年〔文明十三年〕浄土宗の僧観誉が創建、一五七九年〔天正七年〕織田信長の命により、僧柏雄が中興とあります。インターネットの平安京探偵団（http://homepage1.nifty.com/heiankyo/）に掲載されている記事からの孫引きですが、今村明『守護領国支配機構の研究』の資料に天正七年〔一五七九年〕八月十三日付の室町幕府奉行人連署奉書があって、その中に次の記載があるそうです。返り点や振りがなはわたしが仮につけたものなので、まちがっていたらご容赦のほど。

永養寺敷地四町々、東者限二西洞院川一、西者限二油小路町一、北者限二高辻町一、南者限二五条通堀一事、被二仰付一畢、云々。

まさに、この奉書に記載されているところが永養寺の故地。地元に伝わる町名の由来と合致します。ちなみに、この奉書の日付は、室町幕府の最後の将軍足利義昭（あしかがよしあき）が織田信長に追放された年、一五七三年〔元亀四年〕よりもあとです。この時点でも、足利義昭は将軍職を解かれていないので、室町幕府の官僚組織が温存されていたことがわかります。ただし、天正七年〔一五七九年〕一月八日付で、永養寺の再建下知状を出したのは、京都所司代の村井貞勝（織田信長の家臣）であり、信長の支配がこの官僚組織の上に乗っかっていたと推察されます。

ここで、またまた、豊臣秀吉の「天正の地割」が顔を出します。永養寺町は東中筋通の両側町で、この東中筋通こそは、第３回で述べたように、天使突抜町ができたときに新設された通りです。この通りの新設にともなって、天正十三年〔一五八五年〕に、永養寺は、寺町高辻へ移転させられました（『京都坊目誌』による）。権力をたてに、無茶なことをやったものですね。町名に「永養寺」を残したのは、町衆の意地でしょうか。

■　祇　園　祭

菅大臣神社のあたりは、祇園祭では、鉾や山が建ちます。三枚ある町名看板「佛光寺通新町西入菅大臣町」③～⑤の基準は新町仏光寺、その四辻の南に、まず「岩戸山」（新町通仏光寺下ル岩戸山町）。天照大神の岩戸隠れの神話によるもので、真木はなく屋上に松を立て、鉾と同じ形をした曳山です。新町仏光寺の十字路の北には、「船鉾」（新町通綾小路下ル船鉾町）、神功皇后の説話に基づき、船の形をした鉾。

西洞院仏光寺から西へ歩いた、東中筋通との丁字路に、町名看板「東中筋通佛光寺下ル木賊山町」⑥。難読の「木賊山」に「トクサヤマ」とルビがふってあります。東中筋通はここでいったん行き止まり。この看板は、本来なら、東中筋通に面したところに

あるはずですが、現在は仏光寺通に面した南側にあります。たぶん、角の町家の側壁を改修したときに移動したものでしょう。

東中筋通　佛光寺下ル木賊山町 ⑥

この町内には、祇園祭のとき、「木賊山」（仏光寺通西洞院西入ル木賊山町）が建ちます。能の『木賊』にちなんだもの。わが子をさらわれた翁が、信濃の国は園原、伏屋の里で、従者とともに木賊を刈っているところに、都の僧がその子をつれて通りがかり、父子は再会できたという筋。

平定文家歌合に　　坂上是則

そのはらやふせやにおふるははきぎの
ありとはみえてあはぬ君かな

新古今和歌集巻第十一・恋歌一・九九七

途中に新古今集の歌が挿入され、恋歌変じて、親子が相まみえることのできない心情を詠んだ歌として、「ありとはみえて」の解釈が風雅に謡われます。左手に木賊、右手に鎌をもった、悲しげな翁の像が、木賊山のご神体となっています。

綾小路には、「伯牙山」（綾小路通新町西入ル矢田町）が建ちます。周時代、琴の名手伯牙が、その友人の死に際して、真に聴いてくれる人がもういないと嘆いて、琴を壊したという故事にちなんでいます。そこは、杉本家住宅（京都市指定有形文化財）の前。京格子、出格子、犬矢来、虫籠窓など、京町家の典型的な外観です。もとは、屋号「奈良屋」の呉服店で、財団法人「奈良屋記念杉本家保存会」となっています。祇園祭の際には、「伯牙山」のお飾り場になり、屏風、祭に使われるご神体、豪華な懸装品などが飾られます。

■ 膏薬図子

杉本家住宅のすぐ西には、「膏薬図子」という路地があります。綾小路から四条へ抜ける南北の路地で、いったん折れ曲がって見通せないようになっています。「膏薬」は「空也供養」がなまったものといわれ、このあたりに空也上人の道場があったと伝えられています。

この膏薬図子は、仁丹町名看板の宝庫です。まず、膏薬図子の綾小路側の入り口の西側には、町名看板「綾小路通西洞院東入上ル矢田町」⑦（取材当日は、日差しが強くて、上の部分が庇の陰になってしまいました）があり、東側には、「綾小路通西院東入上ル矢田町」⑧があります。後者は、「西院」となっており、「洞」が抜けています。このような脱字は、わたしが知るかぎり、この看板だけです。「東入上ル」の表記は、芸がこまかい。路地を入った場所を示すための工夫です。

町名の「矢田町」は、かってこの町にあった「矢田寺」に由来するもので、矢田地蔵として有名であったといいます。天正十八年〔一五九〇年〕に、豊臣秀吉の京都改造にともなって、寺町三

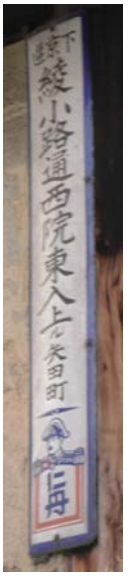
ちなみに、「図子」は「辻子」とも書き、通常は鉤型に折れ曲がった路地を差します（真っ直ぐのもあります）。多分、「天正の地割」以前の市街地で、公権力の強制とは無関係に、土地の有効利用のために自然発生した通路でしょう。「図子」と聞いて、すぐ頭に浮かぶのは、「団栗図子」。まえにも述べましたが、京都の市街地を一なめに焼き尽くしたという天明の大火（一七八八）の火元になったところです。

条上ルの現在地に移転。

路地を北へ進んだところ、東側の壁面にすこし離れて、さらに二枚、町名看板があります。「綾小路通西洞院東入上ル矢田町」⑨と「綾小路通西洞院東入上ル新釜座町」⑩。基準の十字路の表示が同じで、町名が異なります。音便の結果ですが、「釜座」を「かまんざ」と読むのも、あらかじめ知っていなければできませんね。これで、都合四枚「綾小路通西洞院東入上ル」の部分が共通の町名看板が見つかったわけです（一つ「洞」が抜けているのが残念）。こんなことは滅多にない。膏薬図子を仁丹町名看板の宝庫という所以です

膏薬図子には、さらにもう一枚木製の町名看板「綾小路通新町西入上新釜座町」⑪があります。膏薬図子に南からはいると、町名看板⑧～⑩を見たあとに東西部分へ曲がるところ、東南側

綾小路通　西洞院　東入　上ル矢田町　⑦



綾小路通　西院　東入　上ル矢田町　⑧

綾小路通　西洞院　東入　上ル矢田町　⑨

のかどの二階部分に貼ってあります。わかりにくいので以前は見落としていました。この看板は、他の四枚の看板とは、基準の十字路が違い、綾小路新町となっています。他の四枚と比べるとほんの少しだけ新町寄り（柱一本分だけ東寄り）なので、基準の十字路の取り方は極めて論理的なのですが、本当に意識してこのようにしたのかどうかは、今となってはわかりません。仁丹の外交官マークの下に、ローマ字で「AYANOKOJI」と書いてあるのも一興。

綾小路通　西洞院　東入　上ル新釜座町⑩

綾小路通　新町　西入　上　新釜座町⑪　（木製）

さらに進んで、四条通に抜ける南北の通路の西側の壁に祠が埋め込まれていて、「『神田神宮』天慶年間平将門の首を晒したる所也」と書いた銘板がはめ込まれています。『拾遺都名所図会』巻一には、「平将門社」として、「新町通の西、四条の南、膏辻子にあり。天慶三年俵藤太秀郷等将門を滅し、頸を此所に梟しとなり。後世此地に家を建れば祟あり。故に神に祝いて神田明神と崇む。（後略）」と記載されています。神体には、高さ三尺ばかりの瓜のような石を据えたとありますから、もしかしたら写真下方のコンクリートに埋もれた石がそれかもしれません。

祇園祭のときには、この近辺に、「芦刈山」（綾小路通西洞院西入ル芦刈山町）、「郭巨山」（四条通西洞院東入ル郭巨山町）、「四条傘鉾」（四条通西洞院西入ル傘鉾町）などが建ちますが、説明はのちの機会に譲ります。

神田神宮

四条傘鉾の建つ町内、四条通に面した南側の店の室内（御誂各種と書いた看板に隠れているのでちょっとわかりにくい）に、町名看板「四條通西洞院西入傘鉾町」⑫がありました。

■　小野小町の化粧水

四条西洞院の十字路の東南かど（コンビニエンスストアの西壁）に、「化粧水」の碑が建っています。写真に後姿が写っている女性は、四条通の南側歩道を東に向かって歩いていますので、所在地がすぐにわかりますね。現在は井戸はありませんが、四条通を挟んだ向いの京都市伝統産業振興館「四条京町家」（下京区

四條通　西洞院　西入　傘鉾町⑫

四条通西洞院東入ル北側郭巨山町）で、同じ水脈から井戸水が汲み上げられています。

『都名所図会』巻之二には、次のように記載されています。

化粧水は西洞院四条の南にあり。いにしへ、此所に小野小町の別荘ありしなり。これより三間ばかり北に四条通人家の下を西へ流れ、西洞院川へ落ちる溝川あり、藍染川といふ。小野小町にこころをかけし人本望をとげず此川に落入て死せしとなり。故に婚礼の輿入此橋を通る事を忌。

後半は、多分、深草少将の百夜通いの伝説を踏まえた伝承。「百夜通い」とは優雅なひびきですが、今のご時勢では、あきらかにストーカーですね。「こころをかけし人」も、九十九日目に川に落ちて死んだのかもしれません。ちなみに、深草少将が深草から通ったという山科の随心院にも、「小町化粧の井戸」があります。

深草少将の百夜通いの伝説は、脚色されて、能『通小町』に

化粧水の碑

なっています。小野小町は、補陀洛寺〔小町寺〕のある市原で死に、その亡骸は、風雨にさらされ髑髏と化していたといいます。秋風が吹くたびに目の穴に生えた薄が揺れて痛いという髑髏の上の句に対して、在原業平が下の句を付けたという歌が伝わっています。

秋風の吹くにつけてもあなめあなめ
小野とは言はじ薄生ひけり

日本古典文学大系『謡曲集』上「通小町」注三九（岩波書店、一九六〇）

『通小町』の前段はこの伝承を踏まえています。ワキの僧のとこ

ろへ、毎夜ツレの里女が木の実や爪木（小枝）をもって訪ねるので、いぶかしくおもって、名前を尋ねます。「小野とは言はじ。薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ。跡弔ひ給へお僧」と言って掻き消えてしまいます。後段では、僧が小野小町の霊と悟って市原野に出向き、成仏するように弔っていると、シテの深草少将の霊がでてきて、「いや叶ふまじ戒授け給はば、うらみ申すべし。はや帰り給へお僧」と小町の成仏の邪魔をします。少将は、僧に百夜通いの仔細を、小町と掛け合いで語ったのち、二人ともども成仏するというあらすじ。

小野小町は六歌仙の一人。伝説が先行して、実像はよくわかりません。下世話な話ですが、美女であったかどうかも、実はよくわかってないのです。裁縫の仕付けに使う、糸穴のない針を「まち針」といいますが、これは「小町針」の転じたもの。もとになった伝承も眉唾ものです。

ただ、わかるのは、和歌とその周辺のみ。次の古今集の歌は、百人一首にも採られています。

花の色はうつりにけりないたづらに
我身世にふるながめせしまに
小野小町
古今和歌集巻第二・春歌下・一一三

深草少将の話は、あくまでも伝承ですが、そのもとになったと思われる話が、後撰和歌集に載っています。それは、小野小町と僧正遍昭との間にあった、つやめいた歌の贈答です。

いそのかみといふ寺に詣でて日のくれにければ、夜あけてまかりかへらんとてとどまりて、この寺に遍昭侍りと人のつげ侍りければ、ものいひこころみんとていひ侍ける
小野小町

岩のうへに旅寝をすればいとさむし
苔の衣をわれにかさなん
後撰和歌集巻第十七・雑歌三・一一九五

返し
遍昭

世をそむく苔の衣はただひとへ
かさねばうとしいざふたりねん
後撰和歌集巻第十七・雑歌三・一一九六

出家するまえは色好みであったと伝えられている遍昭を、小野小町が多少からかいをこめて詠んだのに対して、遍昭は、そう思われているならままよと、道心を衣に隠し、さらりと受け流しています。さすがに、二人とも手練の六歌仙、丁々発止の受け答えです。

この贈答が脚色されて、歌物語『大和物語』の百六八段に載っています。小野小町が正月に清水寺に詣でたとき、蓑一つを着て、腰に火打笥をつけた僧が読経をしているので不思議におもって、歌の贈答をするという、舞台設定に変わっています。贈答のあと、その僧が少将大徳（僧正遍昭）であると察して、小町が話をしようと追いかけると、掻き消えてしまったとあります。これらの話が伝わるうちに、深草少将の百夜通いの話に発展したものとおもわれます。

遍昭〔八一六～八九〇〕は、桓武天皇の孫で、俗名は、良岑宗貞。

深草の帝（仁明天皇）の蔵人。仁明天皇の死後、出家。六歌仙の一人。出家譚は、『今昔物語』巻十九第一話「頭少将　良岑宗貞　出家話」として伝えられています。百人一首に採られている僧正遍昭の歌は、古今和歌集所載のもので、作者は出家前の名前となっています。

五節の舞ひめをみてよめる　　よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよ
乙女の姿しばしとどめん

古今和歌集巻第十七・雑歌上・九七二

ついでに、今回歩いた界隈からは、ずっと離れていますが、和歌の名手であった小野小町にゆかりの井戸として、「小野小町雙紙洗水遺跡」の碑が、一条戻橋東（上京区一条通堀川東入ル北側）の駐車場の片隅にあります。能の『草子洗小町』にちなんだ井戸です。また、その界隈に出かけたときにご紹介することにいたしましょう。

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第４回）2007/11/1
改 2007/12/20
改 2008/07/13

© 2007 藤田眞作 http://xymtex.com